

時事新報

明治十八年十月一日（木曜日）

舊乙酉八月廿三日 つちのと、丑

（西暦一千八百八十五年）

（西暦一千八百八十五年）

（西暦一千八百八十五年）

るゝ昨年に遊び支那と朝鮮と事をりて其事いまと結局の見込みなき時に當り日本黨は京城に大事を舉て多く支那黨と殺害日本兵の國王を説得せしが支那兵と戦して直に仁川へ退散ために東洋三國の一大關係と生せりされども其後日本政府は朝鮮及び支那と談判して事は平和に局と結びたり先づ以く一時は幸と申すべしも

あらん倍て朝鮮の政權の相變からず閑族が手に在ることなる

が昨年の事以來は兎角日本人と親交むの間に厚からず爰て昨年の變亂ありきても様々の疑惑を抱くが如き畢竟その國人が事に汚るダ故あらんと雖とも之が

たゞに兩國交際は兎角滑かあらざるの様子あるば我輩の間に電線と架設せること、朝鮮國王は間議官を新設して國家の萬機必らず支那と諮詢せんとするよとなど

朝鮮人が支那に歸從の意を表すするこ實ふこの上もなく元來君と仇敵たりし國務院の主として支那政府に歎願し又た閔氏の人々の中ふ其名も高き閔宗默は陳奏使

とありて支那と赴きこれを迎へ歸る杯の内情果して如何なるとならんと實ふ端倪を知るに苦ひ所なり

斯信による小大院君の歸國は九月下旬の由されど今は

どは既に歸國せしことならんさて大院君が歸國したる處にて政權は尙ほ閔氏と歸すべきか、左りして全國士

君と閔泳翊などは如何なる相談をせしや、支那政府は如何なる能はざるも人民はこれぞ黙視して止まんか、

共に疑ひしき所よりと雖も前々よりの行うりみて終々

謂はざる所ありと雖も前々よりの行うりみて終々

夫れ朝鮮は内治外交共に至難の地位見るものなり其

の内情を推して考れば其政治上に多少の波瀾を生じて

此の人々に如何なる助言をなせしや、都聞知する

は干涉と免れんとするか實ふ其政府れたるに一大難

事あり又日本政府より論るも日本政府の如何にして

東洋の一帝國たる面目をみの國と對し又この國と關係せんとする國々に對して保護せんとするわが國はわだ

の外務事宜に參與するの故と以て唯朝鮮の官途に信を得るのみあらず在韓諸外國官民の間にも名聲を馳せ特に國王陛下の信用も厚くして身に重きを爲したりしが

昨年十二月の變乱に逢ひ僅に免かれて日本へ歸りたるは幸中の不幸又不幸中の幸と云ふべし此變乱は就て

朝鮮の士民とも未だに日本人を疑ひ兎角打解けたる場合に至らざるもの多しと雖ども氏が精神の在る所は天

る九日午後二五年の變乱を宮あらせられられたりと

在朝鮮京城公

に舞樂を張り

は幸中の不幸又不幸中の幸と云ふべし此變乱は就て

朝鮮の士民とも未だに日本人を疑ひ兎角打解けたる場合に至らざるもの多しと雖ども氏が精神の在る所は天

は幸中の不幸又不幸中の幸と云ふべし此變乱は就て